

第2章 岩国市の維持向上すべき歴史的風致

岩国市における歴史的風致

本市は、瀬戸内海の島嶼部から中国山地の山間地まで広大な面積を有し、県内最大流域を持つ錦川をはじめとした多くの河川や中国山地の森林等の豊かな自然に恵まれています。江戸時代、錦川に面して岩国城下町は築かれ、錦川や街道を通じた毛利家本藩領との往来により、錦町・広瀬などの川湊はにぎわいをみせました。本市北部の山代地域では、山に囲まれた集落環境の中で、独自の文化が育まれました。また、山陽道をはじめ、古くから多くの街道が通る安芸と周防国境に当たる交通の要衝として、岩国城下町や玖西盆地の宿場町が栄えました。

それらの場所には、寺社や歴史的建造物、祭礼行事や民俗芸能などの歴史文化が数多く継承されています。

歴史的風致は「歴史まちづくり法」第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地環境」と定義されています。

歴史まちづくり法における歴史的風致の定義に基づき、本市が維持向上すべき歴史的風致として、以下の4つを設定しました。

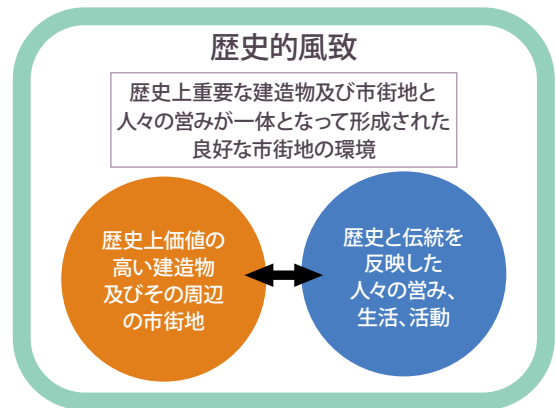


図2-1 歴史的風致の概念図

歴史的風致を構成する要素の取扱について

計画策定後は、歴史上価値の高い建造物や人々の活動について掘り起こしを継続して行い、新たに追加すべき歴史的風致が確認された場合は、計画への追加について協議します。

岩国市における歴史的風致

1. 岩国城下町の営みにみる歴史的風致

2. 錦川の恵みに育まれた営みにみる歴史的風致

3. 山代神楽にみる歴史的風致

4. 玖西盆地の伝統行事にみる歴史的風致

図2-2 岩国市の歴史的風致の構成

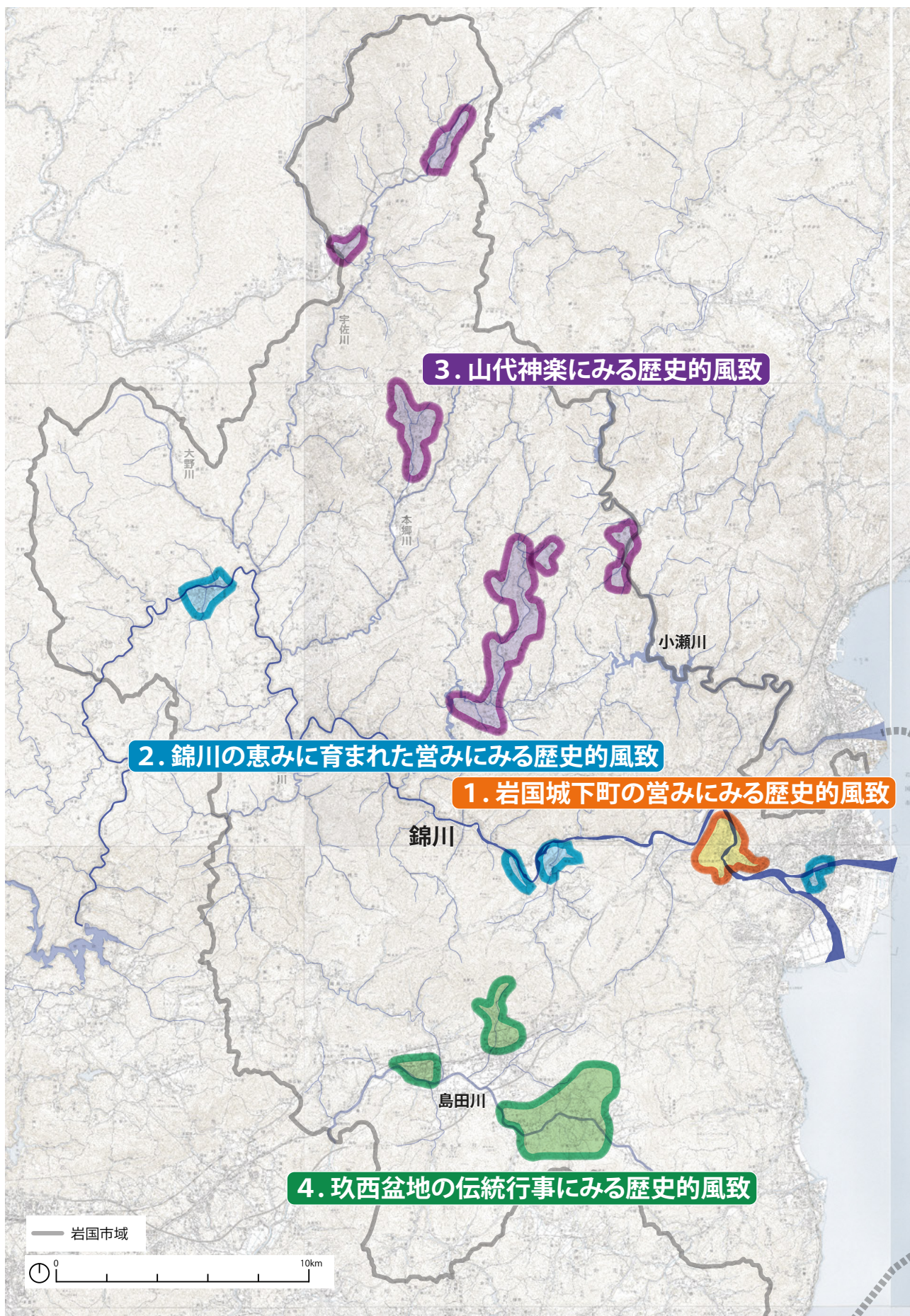


図2-3 歴史的風致の位置図

1. 岩国城下町の営みにみる歴史的風致

(1)はじめに

慶長5年(1600)の関ヶ原^{けいちょう}の戦いののち、岩国の領主となった吉川家^{せきがはら}によって、錦川^{きつかわ}兩岸の岩国城下町の整備が進められました。

岩国城や吉川家居館がある武家のまちとして整備された横山地区^{よこやま}には、香川家長屋門^{かがわけながやもん}や旧目加田家住宅^{きゅうめかたけ}をはじめとする武家屋敷などにより、武家のまちとしての風情を残しています。

主に町人のまちとして整備された対岸の岩国地区^{しいのお}には、椎尾八幡宮をはじめとする神社のほか、商店や住宅を中心とした町家によるまちなみが継承されています。

この兩岸が錦帯橋^{きんたいきょう}によって結ばれることによって、錦川を挟んだ一体的な城下町が成り立っています。この城下町では、奴道中^{やつどうちゆう}、武家の舞として継承されてきた岩国南条踊^{いわくになんじょうおどり}、町民の盆踊りとして継承されてきた小糠踊り^{こぬかおど}が、現在でも錦帯橋まつりなどで披露されており、33年期に一度の椎尾八幡宮大祭の際には通りに幟旗^{のぼりぼた}が立ち、町家の軒下や塀には御幣^{ごへい}が連続して吊るされ、通りを神輿^{みこし}や山車^{だし}が行進しており、城下町の祭礼行事を今に伝えています。

また、江戸時代から観光に訪れる人で賑わっていた錦帯橋周辺には、明治時代から桜並木が整備され、昭和初期には錦帯橋のう飼^{うかい}が催される様になり、地域の人々の努力によって四季を通して多くの観光客を楽しませています。

※岩国市においては、錦帯橋周辺で実施する鵜飼^{うかい}を「錦帯橋のう飼」という名称で統一しています。本計画書においても、「錦帯橋のう飼」、「う飼」の表現をもちい、鵜、鵜匠、鵜飼舟などについては漢字での記載とします。



錦帯橋で結ばれる岩国城下町

②錦帯橋の架橋と江戸時代から続く観光名所

急な増水を繰り返す錦川の水の流れ、約200mという広い川幅などの地形条件に対応するために、吉川家によって、横山地区と岩国地区を結ぶ錦帯橋が延宝元年（1673）に架橋されました。

錦帯橋は、江戸時代においては誰でも渡れる橋ではありませんでしたが、その独特の構造美から日本「三奇橋」のひとつといわれ、広く知られました。そして、錦帯橋を見るために多くの人が訪れ、岩国では旅人相手の生業（観光業）が発展していきます。

明治時代になると、岩国地区の錦川沿いを中心に旅館や土産物屋が建ちはじめています。

横山地区では、明治時代当初に学校施設（旧制岩国中学校、のちの岩国高等学校）等が整備されることと合わせて、吉川家居館跡に吉香神社が移設されました。桜の植樹も明治期から盛んに行われます。錦帯橋は広く一般の人々が往来できるようになり、観光の動線は横山地区へと広がっていきます。

そして、昭和37年（1962）の岩国城再建※、昭和38年（1963）の岩国城ロープウエーの完成により、城山や再建天守閣から錦帯橋や城下町、瀬戸内海を望むことができるようになりました。昭和43年（1968）には、岩国高等学校が移転し、跡地は吉香公園となっています。また、戦後から錦帯橋のう飼が催されるようになりました。平成29年（2017）には鵜の飼育施設・見学施設として、「吉香鵜の里」がオープンしています。

このように、岩国城下町は、町家が残り川沿いを中心に旅館や土産物屋が発展した岩国地区と、武家のまちの面影を残しながら教育施設から公園へと整備が進められた横山地区をつなぐ形で、錦帯橋を中心に、観光名所としてのまちなみが時代を超えて形成されています。

※岩国城は、往時と同様の桃山風南蛮造りの外観復元による四重四層の鉄筋コンクリート造で、錦帯橋付近や麓からの景観を考慮し、旧天守台から南へ50mの場所に再建されました。



錦帯橋と岩国城



吉香神社



再建された岩国城



横山地区と岩国城を繋ぐ岩国城ロープウエー（出典：岩国市ホームページ）

2) 岩国城下町の営みに関わる歴史的建造物

① 構造物

ア) 錦帯橋

【名勝】

建造年代：延宝元年（1673）

（昭和28年（1953）再建）

岩国領2代目領主吉川^{きつかわ}広正^{ひろまさ}は、錦川デルタの干拓による新田開発や和紙の製造等の岩国領財政基盤をつくった人物です。岩国城下町の更なる発展のために、吉川広正によって、吉川家居館があり政治の中心であった横山地区と中級武士や町民が住み経済の中心であった岩国地区とを結ぶ橋が、明暦^{めいれき}3年（1657）に創建されました。しかし、万治^{まんじ}2年（1659）の大雨による錦川の氾濫によって流失しました。

錦帯橋は、その後、岩国領3代領主吉川^{きつかわ}広嘉^{ひろよし}により創建された5連の橋です。

建造された錦帯橋は、錦川に4つの橋脚、両岸に各1つの橋台を築き、木造による3つの反り橋（アーチ橋）と2つの桁橋を架けています。水流を調節し、河床^{かしょう}の地盤が流失することを防ぐために河床には敷石を配した護床工^{ごしょうこう}となっています。

創建以来、2度の流出を受けており、昭和25年（1950）の洪水による2度目の流失の際には、鉄筋コンクリートによる再建の意見もありましたが、市民の強い要望により、上部を木造により再建され、創建時と変わらない姿を今に伝えています。



錦帯橋周辺の護床工



錦帯橋



昭和28年（1953）の錦帯橋渡り初め式
（岩国徴古館蔵）



下から見た錦帯橋のアーチ構造（出典：岩国市ホームページ）

古くから多くの人々に親しまれ、その証として多くの古写真も残されており、昭和28年(1953)に再建された際の、錦帯橋渡り初め式の写真等があります。

錦帯橋の特徴は、岩国城下町を分断する錦川に架橋するために考案された独創的なアーチ構造を有する橋であり、その構造から生じる美しい姿です。そして、近世から錦川兩岸を繋ぐ橋と、周辺の山々や兩岸のまちなみとが一体となって良好な景観が形成されていること、さらに、橋の機能や姿、周辺と一体となった景観を継承していくために、近世の創建以降、架橋技術の継承や改良を行いながら維持、再建されてきたことが特徴といえます。

錦帯橋は5つの木造の橋が連なる構造であり、その内、中央3連は迫持式^{せりもちしき}といわれるアーチ構造となっています。この独創的なアーチ構造は、桁^{けた}とよばれる部材を重ね、楔^{くさび}を桁の間にに入れて勾配を緩めて迫り出していき、両側の橋脚からのばした桁を中央部の棟木で結合することで実現しています。(架橋技術の伝承に向けた取組については、関連計画に記載しています。)

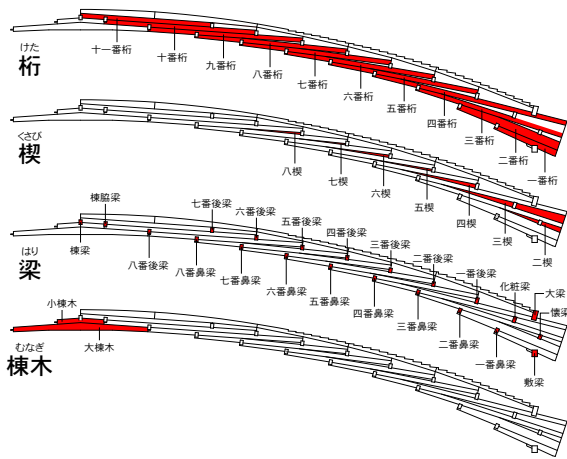
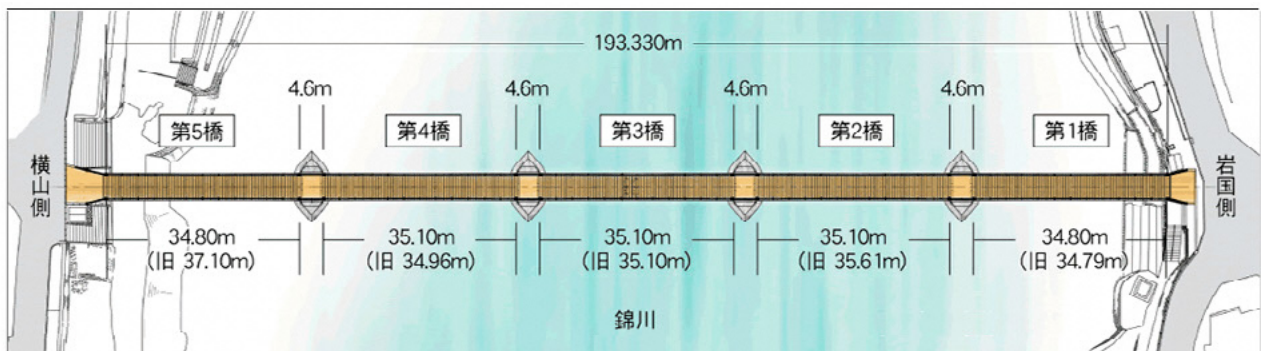


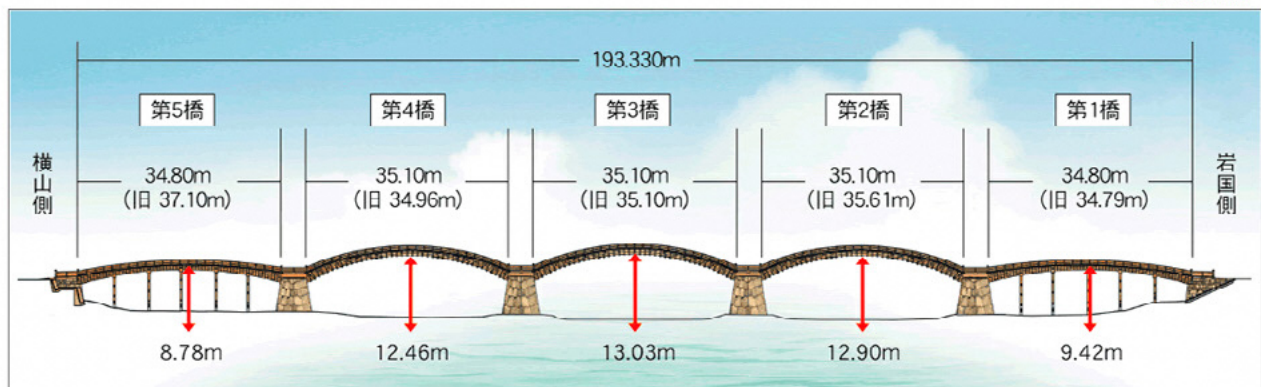
図2-5 アーチ部材説明図(出典:岩国市ホームページ)



平成の架替え工事時の構造(出典:岩国市ホームページ)



錦帯橋 平面図



錦帯橋 側面図

図2-6 錦帯橋の平面・側面図(出典:岩国市ホームページ)

錦帯橋は錦川兩岸の横山地区と岩国地区を結び、今もなお多くの人々の往来を支えています。また、兩岸に形成された岩国城下町の視覚的な一体感を高め、椎尾八幡宮大祭、錦帯橋まつりや岩国南条踊、小糠踊りといった祭礼行事や民俗芸能の背景や、春は桜の花見、夏は錦帯橋のう飼の背景として欠かせない存在であり、四季折々で魅力的な姿を見せます。



錦帯橋・昼（出典：岩国市ホームページ）



錦帯橋・夜（出典：岩国市ホームページ）



錦帯橋・春（出典：岩国市ホームページ）

② 寺社

ア) 吉香神社

【重要文化財（建造物）】

建築年代：享保13年（1728）、明治18年（1885）現在の地に移築

室町時代末期の元龜4年（1573）に吉川元春・元長親子によって、現在の広島県北広島町新庄にある龍山八幡神社境内に吉川興経の霊社として創建されたことがはじまりとされ、その後、明治2年（1869）に吉川経義・興経・元春・広家・経幹の5人の吉川家当主を祀る吉香神社と名づけられ、現在は吉川家歴代当主24人を加えて祭神は29柱となっている祖霊神社です。

明治18年（1885）に白山比咩神社境内から現在の吉川家居館跡に吉香神社が移された当時の神門は瓦葺であったことが移築工事時の写真から伺えますが、現在は檜皮葺の美しい姿で佇んでいます。その神門をくぐると入母屋造の屋根の両側面に千鳥破風と跳ねを持つ庇が設けられた複雑な形状の美しい檜皮葺の拝殿が現れます。その奥に控える檜皮葺の三間社 流造で千鳥破風と向拝に軒唐破風を持つ本殿は白壁塀に囲まれているために間近に見ることは叶いませんが、堀側側面からその美しい屋根や組物、彫刻を目にすることができます。

享保13年（1728）に上棟したことを示す棟札が残されているほか、明治18年（1885）に移築された際の棟札があり、そこには吉香神社創建、合祀の経緯が記されています。

岩国領主であった吉川家の縁の神社ということから、春祭りでは華道家元による献華や茶道家元による奉茶が行われ、秋の例大祭では岩国南条踊が境内で舞われる等、一般的な氏子神社とは異なった神事を見ることができ、吉香神社境内や周辺には多くの桜があることから桜の季節には多くの花見客が訪れます。



吉香神社（明治18年（1885）頃、岩国徴古館蔵）



吉香神社と旧吉川邸（明治27年（1894）、岩国徴古館蔵）



吉香神社神門（明治18年（1885）移築）



吉香神社拝殿（明治18年（1885）移築）



吉香神社本殿（明治18年（1885）移築）



吉香神社本殿側面（明治18年（1885）移築）

イ) 椎尾八幡宮

【重要文化的景観の重要な構成要素】

建築年代：神殿：明治13年（1880）以前、拝殿：昭和10年（1935）

岩国領2代目領主であった吉川広正によって、初代領主の父・吉川広家が没した翌年（かんえい）の寛永3年（1626）に吉川家の守護神である鶴岡八幡宮（つるがおか）からの分霊とこの地に古くからあった猿田彦神（さるたひこのかみ）を合祀して椎尾八幡宮を造営したと伝えられています。

昭和29年（1954）に現在のバス通り（市道 錦見61号線）の工事によって、ほぼ直線であった参道石段の形態は現在の石積法面と折れ曲がり石段に変わっていますが、元禄6年（げんろく）（1693）の刻銘のある石鳥居は今も訪れた人を参道入口で迎えてくれます。境内へと続く170段の石段は、上りの際には江戸時代から大正時代の多くの石灯籠や狛犬を目にすることができ、下りでは岩国城下町を眼下に一望できます。

境内では両袖に脇殿を持ち入母屋造の屋根の両側面に千鳥破風と跳ねを持つ庇が設けられた複雑な形状の美しい銅板葺の拝殿が現れます。拝殿は昭和10年（1935）に改築されたもので、昭和9年（1934）の上棟式の古写真が残されています。その奥に控える神殿は間近に見ることはできませんが、延宝12年（1680）に建造されたものであることが明治13年（1880）の神社明細書に記されています。



明治時代の椎尾八幡宮石鳥居と参道石段（岩国徴古館蔵）



椎尾八幡宮拝殿改築時の上棟式（昭和9年（1934）、中澤家提供）



元禄6年(1693)の刻銘のある石鳥居と石積法面



境内に続く170段の石段



椎尾八幡宮拝殿



側面駐車場から見た椎尾八幡宮拝殿・協殿と後方の神殿

③屋敷・町家・門等

ア) 旧目加田家住宅

【重要文化財(建造物)】

建築年代:江戸時代後期

旧目加田家住宅は、吉川家の家臣・目加田家の中級武家屋敷です。

敷地周辺の一帯が都市公園として整備されることを契機に調査が行われ、重要文化財の指定とともに本市が取得し、昭和52年(1977)から昭和54年(1979)にかけて修理が行われ、市の施設として公開活用が図られています。

敷地は江戸時代からの屋敷割を残し、建物は入母屋造一部2階建、屋根は「二平葺き」と呼ばれる両袖瓦を利用した独特の葺き方が残る岩国の武家住宅の典型例です。内部は土間部分が小さく、中廊下式の平面をもちます。建築は改造が少なく、岩国における中流武士階級の住居様式を現在まで伝えています。

吉香神社例祭の岩国南条踊奉納の際には、準備場所である岩国高校記念館から奉納場所である吉香神社に向かう踊り手の移動ルート沿いにあり、旧目加田家住宅の横を袴を履いた踊子を通る様子を見ることができます。



旧目加田家住宅



両袖瓦を利用した二平葺きの屋根

イ) 香川家長屋門^{かがわけながやもん}

【県指定有形文化財（建造物）】

建築年代：17世紀末

香川家長屋門は、岩国領家老香川氏の表門です。

門の屋根は入母屋造、本瓦葺で、正面に向かって左寄りに出入り口があり、大小の扉をしつらえています。門の左側に茶室が設けられており、右側は三部屋に分かれています。市内の建造物としては最も古いものの一つで、武家屋敷の構えをよく残しており、岩国城下町の面影を今に伝える建造物です。

門の正面には、桜の大樹が育ち、桜が咲き誇る頃には、建物周辺を多くの人が訪れます。また、錦帯橋まつりでの奴道中、岩国南条踊、小糠踊りの行列が門前を通ります。



香川家長屋門



香川家長屋門 正面左側の茶室部分

ウ) 昌明館付属屋及び門^{しょうめいかん ふぞく やおよもん}（吉川史料館）

【市指定有形文化財（建造物）】

建築年代：寛政5年^{かんせい}（1793）

昌明館付属屋及び門は、昌明館の付属屋として現存する近世の長屋2棟と門です。昌明館は、寛政5年（1793）に建てられた岩国領7代領主吉川経倫^{つねとも}の隠居所^{つねただ}であり、経倫の死後、8代領主経忠^{きょう}の夫人・喬松^{しょういん}院が居住しました。明治4（1871）年の廃藩置県の際には岩国県庁が置かれました。その後、吉川家職員の執務場所である用達所が設けられ、近代吉川家の岩国における拠点となっていました。

現在、旧昌明館の敷地の多くが吉川史料館として利用され、旧岩国領主吉川家が所有する歴史資料などを収蔵・展示しています。

門は吉川史料館の正門として活用され、付属屋は、屋根が入母屋造^{だしげたづくり}、出桁造、両袖瓦葺であり、岩国城下町の面影を今に伝えています。

門の正面には桜が植えられ、桜が咲き誇る頃には、建物周辺を多くの人が訪れます。



昌明館付属屋及び門（門部分）



昌明館付属屋及び門（付属屋部分）

工) 旧吉川邸 厩門

【登録有形文化財】

建築年代：明治25年（1892）頃

旧吉川邸厩門は、岩国領13代領主であり明治維新期には岩国藩知事も務めた吉川経健^{つねたけ}の邸宅に付随する木造平屋建、瓦葺の長屋門です。建築年代は明らかではありませんが、経健邸宅が明治25年（1892）に建てられているため、同時期の建築と考えられます。

建物は、桁行^{けたゆき}が30mと長大です。西を正面とし、石積基壇上に建ちます。漆喰塗大壁などの伝統的な形式を保ちながら、キングポストトラスの洋小屋などの洋風の要素が取り入れられており、時代の特色をよく示し、近代の大邸宅の様子を今に伝える建物です。

正面には、堀を隔てて、吉香神社が位置しており、春先には対岸に面する吉川家居館跡の堀沿いに桜が咲き誇り、建物周辺を多くの人が訪れます。



旧吉川邸厩門



旧吉川邸厩門 キングポストトラスの洋小屋

オ) 錦雲閣

【登録有形文化財】

建築年代：明治18年（1885）

錦雲閣は、吉川家居館跡が開放された際、吉川家歴代を祀る吉香神社内の絵馬堂^{えまどう}として建てられた建物です。木造の楼閣風建築で、屋根は入母屋造、棧瓦葺となっています。

階下の内部は全面土間で、絵馬を懸けるために天井が高く、絵馬を鑑賞するための腰掛縁が設けられています。

春先には錦雲閣が面する堀沿いに桜が咲き誇り、建物周辺を多くの人が訪れます。



錦雲閣



お堀と紅葉の錦雲閣

カ) 國安家住宅（本家松がね）

【登録有形文化財】

建築年代：嘉永3年（1850）又はそれ以前

國安家住宅（本家松がね）は、鬢付け油「梅が香」、
「蘭の雫」の製造販売を行っていた「松金屋」の主屋
として建てられた商家住宅です。客座敷床の間の座板
裏面に嘉永3年（1850）の墨書銘があることから、嘉
永3年（1850）又はそれ以前の建築と推測されます。

昭和初期に國安家に買い取られ醤油製造が営ま
れました。その後、本市が取得し、平成29年（2017）に
岩国市観光交流所「本家松がね」としてオープンして
います。

建物は間口9間、厨子二階、平入、瓦葺の町家建
築です。厨子二階の正面にあけられた虫籠窓は横格
子となっており、この建物の特徴づけています。後世
の改変が比較的少なく、江戸時代の岩国城下町の様
子を伝える商家として貴重な建物です。

岩国市観光交流所「本家松がね」での取組として、小
糠踊りの体験会が催されるほか、椎尾八幡宮大祭の際
には建物に御幣が吊るされ、建物の面する本町筋は御神
幸ルートになっています。



國安家住宅（本家松がね）（出典：岩国市ホームページ）



横格子の虫籠窓

④文教施設

ア) 岩国学校教育資料館

【県指定有形文化財（建造物）】

建築年代：明治3年（1870）、明治5年（1872）増築

岩国領の最後の領主となった吉川経健によって、岩
国の将来を担う若者たちの学びの場として先進的に
外国人教師を雇用するなどした岩国英国語学所とし
て、明治3年（1870）に建てられた建物です。当初は
和風の2階建の建物でしたが、明治5年（1872）に3
階部分が増築されました。明治初期の学校建築とし
ても特異な和洋折衷の姿を残す建物として、昭和44年
（1969）に山口県の有形文化財に指定されています。

現在は岩国学校教育資料館として活用されており、
岩国小学校の敷地内に建つことから、広く地域の人々
に親しまれています。4月29日（祝日）に開催される
錦帯橋まつりでは、岩国南条踊や奴道中（錦見イキリ



増築当時の古写真（岩国学校教育資料館蔵）



現在の岩国学校教育資料館

子)等の行列のスタート場所にもなっており、岩国小学校グラウンドが奴道中の練習場所にもなっているため、4月には賑やかな声が響き渡ります。



現在の岩国学校教育資料館

イ) いわくにこうこう きねんかん 岩国高校記念館

【重要文化的景観の重要な構成要素】

建築年代：大正5年（1916）

岩国高校記念館は、旧制岩国中学校の武道場として建てられた建物であり、棟札から大正5年（1916）の建築です。旧制岩国中学校から、岩国高等女学校、山口県立岩国西高等学校（のちの岩国高等学校）へと学校が変わる中でも、校舎の一部として使われ続けてきた建物です。昭和45年（1970）の岩国高等学校移転に際して現地の吉香公園の中に保存されることとなり、昭和45年（1970）からは「岩国高校記念館」や「横山自治会館」としても利用されるようになり、現在に至っています。

建物は、木造平屋建、屋根は入母屋造、瓦葺の建物で、和洋折衷の意匠がみられます。近世の武家屋敷や藩政に関わる建物から、近代以降、旧岩国高校や公園としての土地利用が進んだ横山地区の歴史を示す建造物といえます。

錦帯橋まつりの行列が前面を横切り、公園内の桜が咲き誇る頃には、建物周辺を多くの人々が訪れます。また、岩国南条踊の練習が行われ、練習の日には笛、太鼓の音が周囲に響き渡ります。



岩国高校記念館



洋風の意匠が取り入れられた外観

ウ) 岩国徴古館^{いわくにちょうこかん}

【登録有形文化財】

建築年代：昭和20年（1945）

岩国徴古館は、吉川家によって美術工芸品や歴史資料を展示保管する博物館として建てられた建物です。昭和26年（1951）に本市に寄贈され、現在は岩国市立博物館「岩国徴古館」として使用されています。

建物は、岩国中学校出身の佐藤武夫^{さとうたけお}の設計であり、太平洋戦争中の資材不足の中、煉瓦造、屋根は寄棟造瓦葺^{よせむね}で外壁には鉾^{こさ}澤^{さい}タイルを使用しています。ドイツ古典主義の影響がみられる意匠は正面の列柱や内部の柱に特色があります。

敷地内の桜が咲き誇る頃には、建物周辺を多くの人が訪れます。



岩国徴古館（出典：岩国市ホームページ）



岩国徴古館の鉾澤タイルによる外壁

(3) 岩国城下町の営みに関わる人々の活動

1) 芸能

いわくになんじょうおどり

① 岩国南条 踊

【県指定民俗文化財、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財】

岩国南条踊は、踊子が輪になって踊り、歌をうたい、笛・鼓・太鼓・銅鈸子（岩国南条踊の手拍子）・ササウなどで囃す中世の風流踊の流れを汲む踊りといわれています。天正5年（1577）から天正10年（1582）ころに端を発しているといわれています。

その起源は諸説ありますが、吉川元春が南条元統（伯耆国（現在の鳥取県米子市、倉吉市付近）の武将）の城を攻め落としたとき、ちょうど盆のころであったため、雲州平田（現在の島根県出雲市）の陣中に抑留していた南条家の捕虜が南条家伝来の盆踊のことを物語りました。これを番人らが習い覚え、元春の許しを受けて仲間に伝え、平田の鰐淵山で踊ったことが始まりであるといわれています。

幕府との戦争があった緊迫した年である慶応2年（1866）に岩国南条踊は一旦休止していましたが、明治16年（1883）に地元有力企業の代表が再興を働きかけ、岩国南条踊を覚えている者が多かった地区に伝わる踊りを基にして復元していき、再開されました。

明治32年（1899）には指導者が個人的に伝習活動をするようになり、昭和27年（1952）に記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されました。これを機に、昭和30年（1955）に岩国市教育委員会も交えて保存会を作り、保存活動を行うようになりました。旧吉川邸や吉香神社、城山、錦帯橋下の河原で踊られる古写真も残されています。

本来は盆の時期に踊るものでしたが、現在の活動の機会としては、主に4月の錦帯橋まつり、8～9月の岩国民俗芸能まつり、11月の吉香神社例大



旧吉川邸での岩国南条踊（岩国徴古館蔵）



吉香神社での岩国南条踊
（昭和35年（1960）、岩国市報）



城山での岩国南条踊の様子
（昭和37年（1962）、出典『岩国の南条踊』（昭和56年（1981））



錦帯橋下での岩国南条踊の様子
（昭和55年（1980）、出典『岩国の南条踊』（昭和56年（1981））

祭があります。また、33年期に1度の椎尾八幡宮大祭でも奉納しています。

錦帯橋まつりでは、大名行列に加わり、岩国小学校をスタートし、大明小路を通り、錦帯橋を渡った先で踊ります。

吉香神社例大祭では、練習場所である岩国高校記念館（横山自治会館）で準備をし、旧目加田家住宅の横を通して吉香神社に向かい、境内で踊りを奉納します。



吉香公園での岩国南条踊（岩国市蔵）

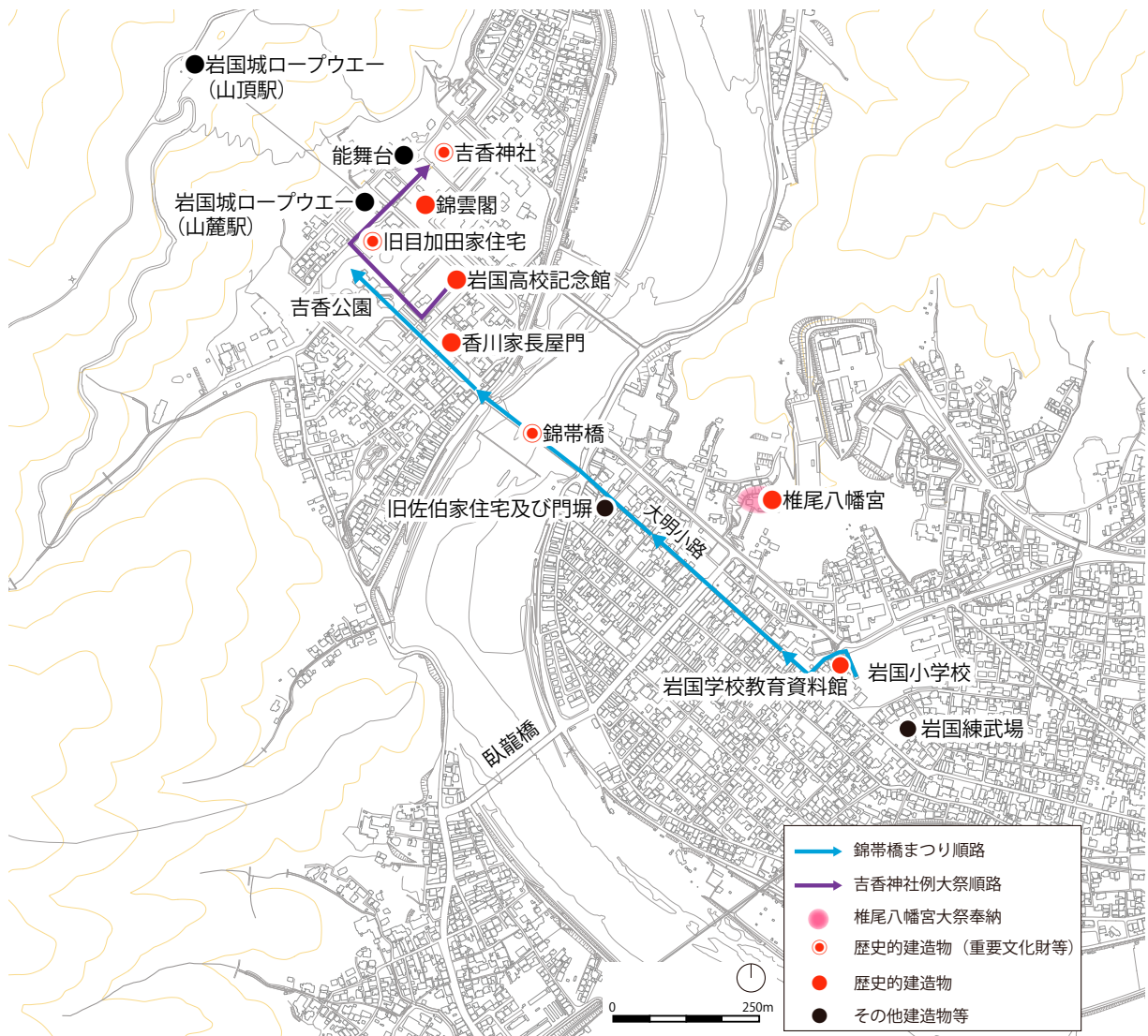


図2-7 岩国南条踊の順路・奉納場所

こぬかおど
②小糠踊り

小糠踊りは、江戸時代から岩国地区に踊り継がれてきた盆踊りです。

第二次大戦前には休止していましたが、昭和23年(1948)に再開して以降、岩国地区内の街路で小糠踊りの講習会を毎夜開いて技術の伝承に努めました。そして、昭和26年(1951)7月29日に岩国小学校講堂で行われた第1回郷土芸能発表会で小糠踊りは上演されました。活動の様子として、昭和33年(1958)の錦帯橋下の河原で踊られている古写真が残されています。現在は小糠踊り保存会が保存に努めています。

太鼓を据え、ときに三味線も交えて、そのまわりを七七七五調の小歌を歌いながら手踊りし、浴衣姿の踊り手たちが通りを練り歩きます。小歌は即興で作って口ずさむもので、気の利いたもの、他者の共感を得たものが歌い続けられ、伝えられてきました。

かつては盆の期間、岩国地区において場所を変えながら各地で踊られていましたが、現在は、春の錦帯橋まつりや8月15日の夕方に実施される「こぬかの盆」で踊られています。また、本家松がねにおいて、小糠踊りの体験会が開催されている他、岩国民俗芸能まつりに小糠踊り保存会が参加し、踊りを披露しています。

錦帯橋まつりでは、岩国小学校をスタートし、3箇所³の交差点(辻)で輪になって踊りを披露し、錦帯橋を渡ります。

こぬかの盆では、^{ずいそうじ}瑞相寺でお祈りをしたあと、^{ざいもくまち}材木町・^{うおまち}魚町筋において二手に分かれ、両端から踊りはじめ、二つの行列が筋の中心付近で合流して輪踊りがなされます。小糠踊り保存会や地元の人に加え、見物客も輪に加わり見様見まねで踊りが踊られ、岩国地区の夏の風物詩となっています。



錦帯橋下の河原での小糠踊り(昭和33年(1958)、小糠踊り保存会提供)



吉香公園での小糠踊り(小糠踊り保存会提供)



錦帯橋まつりでの小糠踊りの様子
(出典: 岩国市ホームページ)



こぬかの盆の様子(小糠踊り保存会提供)

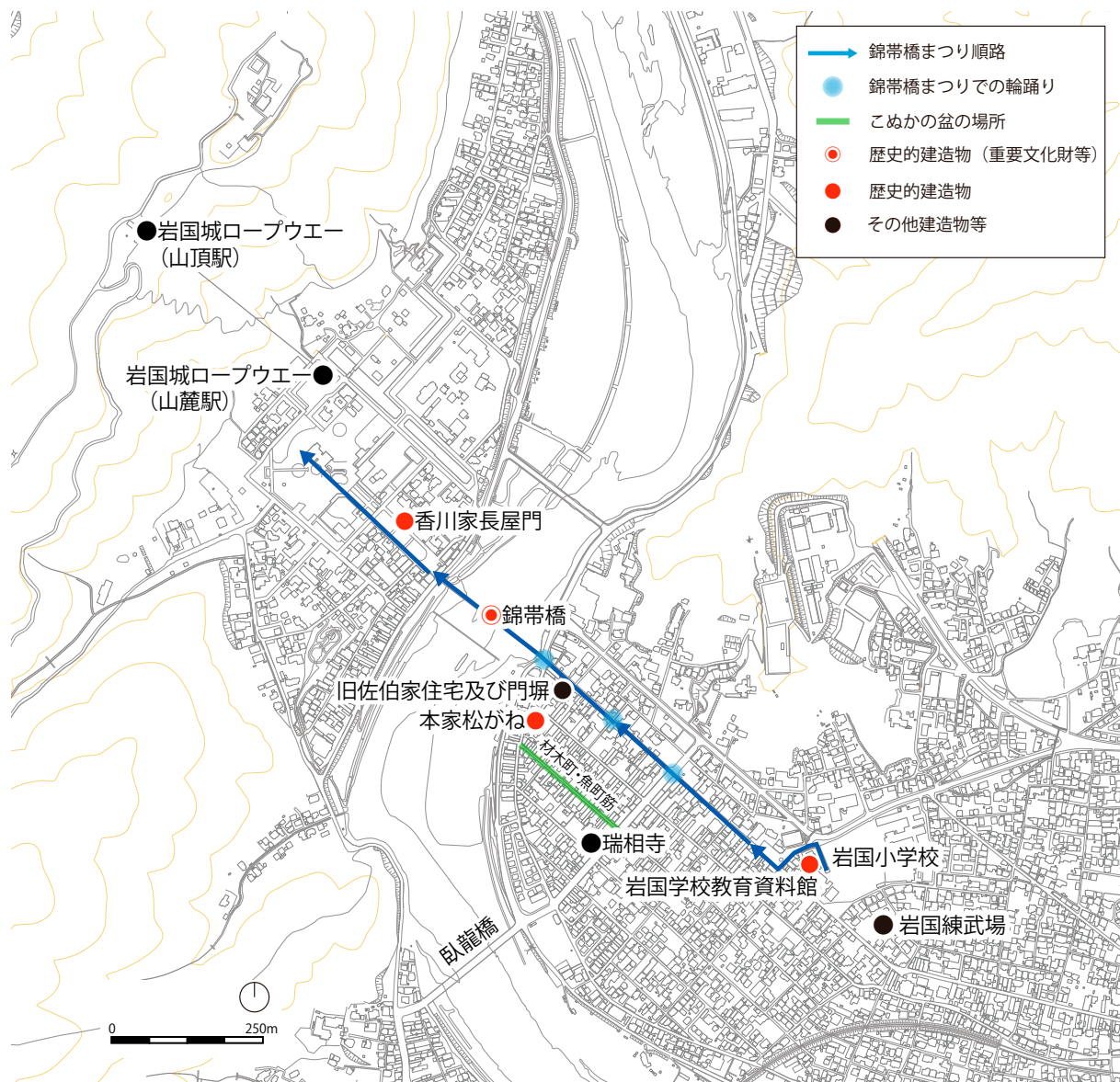


図2-8 小糠踊りの順路・実施場所

やっこどうちゅう

③ 奴道中（錦見イキリ子）

奴道中（錦見イキリ子）は、関ヶ原の戦い後、国替え減封によって下級家臣が不足していた吉川広家が岩国城に入城する際に、直属の二本差し家臣も奴姿で練り歩いて入城したことを始まりとする吉川家家臣による岩国城（居館）を中心とした城内奴の形式を受け継いだものと伝承されています。そのため、一文字菅笠^{いちもんじ すががさ}を被り、腰に大小二本の刀を差した落ち着いた着物姿が衣装的な特徴です。



出典：第7回椎尾八幡宮33年大祭神幸行列図（明治18年（1885）、椎尾八幡宮蔵）

錦見イキリ子の「いきり」とは、物静かな佇まいから勢いよく姿を現す言葉で、錦見イキリ子の行列行進の気品を保つ姿勢で静かに前進し、大道具の受け渡しは大きな間隔で勢いよく遠くへ投げ渡す様から、イキリコと呼ばれています。



錦帯橋まつり（大明小路）での様子（村田正寛氏提供）



錦帯橋まつり（錦帯橋）での様子（村田正寛氏提供）



錦帯橋まつり（錦帯橋・橋本）での様子（村田正寛氏提供）



錦帯橋まつり（香川家長屋門）での様子（村田正寛氏提供）

明治18年(1885)の第7回椎尾八幡宮大祭(三十三年式年大祭)時の神幸行列図の中に錦見イキリ子の奴道中の様子を見ることができますが、確認できる写真としては、大正6年(1917)の第8回椎尾八幡宮年大祭のものが最古のものとして存在します。



第8回椎尾八幡宮33年大祭(大正6年(1917)、村田正寛氏提供) 第1回岩国祭(昭和32年(1957)、村田正寛氏提供)

現在の活動としては、椎尾八幡宮大祭のほか、昭和32年(1957)に始まった第1回岩国祭(現在の錦帯橋まつり)に継続して参加しています。

また、奴道中自体は通年を通して行われるものではないので、昭和55年(1980)に設立された錦見イキリ子保存会が中心となり、道具や衣装類の保存・修繕を行いながら、後継者育成と地域への奴道中文化の普及・啓発を兼ねて近隣の中学校と連携しています。



『岩国錦見のイキリ子』(平成13年(2001))

錦見イキリ子保存会においては、『岩国錦見のイキリ子』(平成13年(2001))を編さんし、現在までの活動の歴史のみならず、道具の扱い方、草履の履き方から着物の着付、行列の配置や編成、動きに至るまで写真や図を豊富に用いて記録を行って、錦見イキリ子の文化と歴史の伝承にも力を入れています。



草履の履き方(抜粋)

図2-9 草履の履き方の説明図
(『岩国錦見のイキリ子』(平成13年(2001))より抜粋)

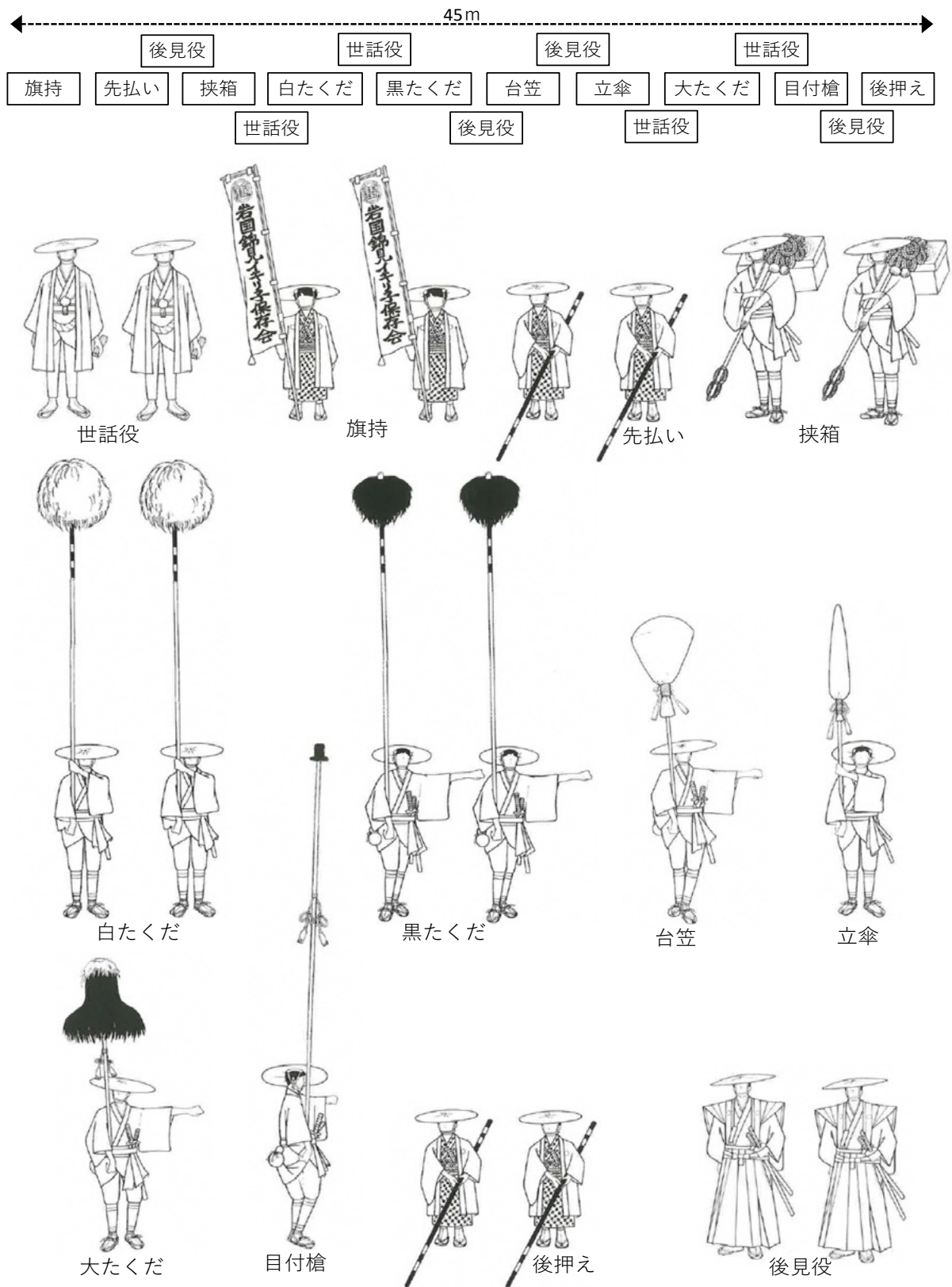


図2-10 奴道中の行列配置・編成（『岩国錦見のイキリ子』（平成13年（2001））掲載図を再配置し作成）

奴道中（錦見イキリ子）は、錦帯橋まつりにおいて、大名行列の一部として行進を行います。

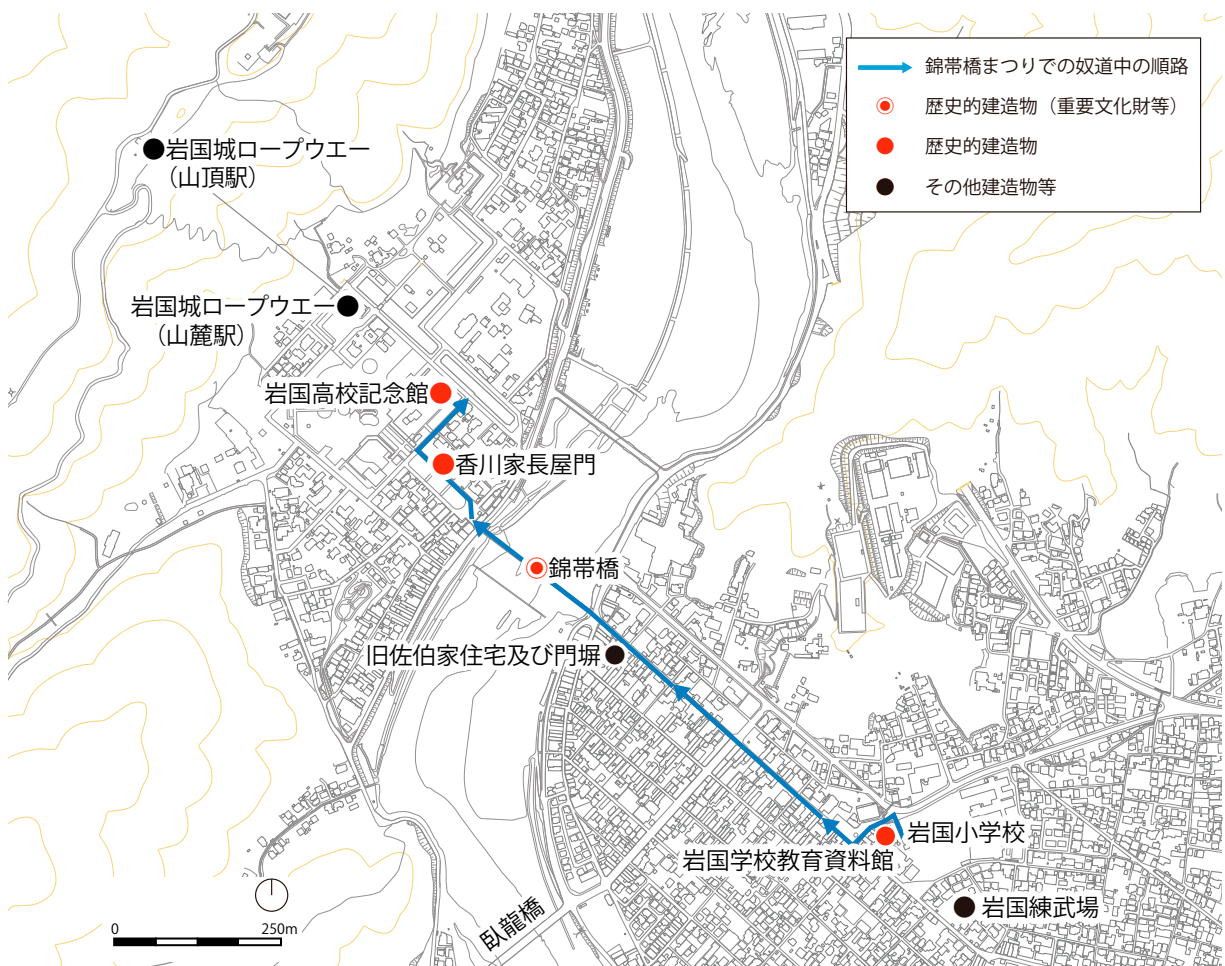
普段の練習場所でもある岩国小学校グラウンドに隣接した岩国学校教育資料館を出発し、大明小路を直進して錦帯橋を渡り、吉香公園を進み香川家長屋門の前を通り、吉香神社方向へと抜けていきます。



錦見イキリ子の練習風景
(岩国小学校グラウンド、村田正寛氏提供)



錦帯橋まつりの岩国学校教育資料館からの行列出発
(村田正寛氏提供)



2) 祭礼

しいの お はちまんぐうたいさい

① 椎尾八幡宮大祭（三十三年式年大祭）

岩国地区に位置する椎尾八幡宮では、33年期に1度、10月22日に近い日曜に開催する大祭があります。『第十回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』（昭和59年（1984））に記された「椎尾八幡宮縁起と大祭創始以来の記録」によると、椎尾八幡宮は、寛永3年（1626）に創建したとされ、以来、毎年祭事を行っていましたが、寛文元年（1661）から現在のような33年期に1度、開催されるようになりました。（『第十回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』では、当時、岩国領では儉約を求められ、諸事の入費を削減しようとした政策の影響を受けたものであるとも考えられています。）

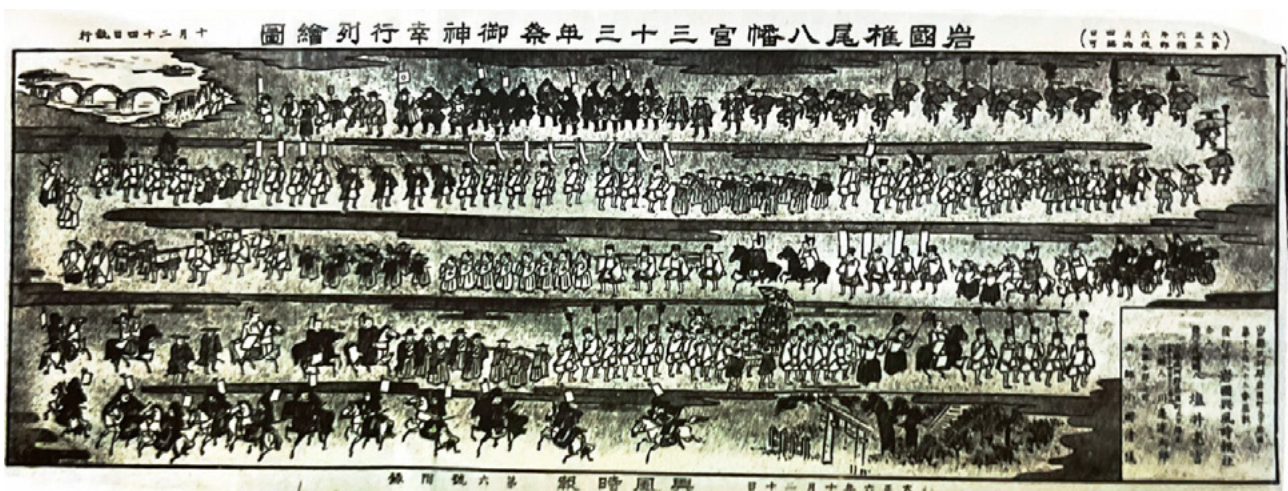
近代においては、大正6年（1917）の御神幸行列の絵図と昭和24年（1949）の第9回大祭の古写真が残されています。行列の長さは鳥居から川原に設けられた御旅所まで続くほどであったとされ、また、遠方から来た見物人もおり、その数は5～6万人に及んだといえます。大明小路の家々は塀の上に^{さじき}棧敷を掛けて国旗を揚げたり、座敷に金屏風を立てて飾ったりしたといい、川原には飲食店や諸芸の小屋が設けられ、多くの人々で賑わったといえます。



第9回大祭の様子
（昭和24年（1949）、出典：岩国錦見のイキリ子）



第10回大祭の様子（昭和56年（1981）、
出典『第十回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』（昭和59年（1984））



岩国椎尾八幡宮三十三年祭御神幸行列絵図（大正6年（1917）、出典『第十回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』（昭和59年（1984））

近年では、平成25年（2013）に11回目の大祭が行われました。なお、大祭のない年は通常の例祭として、境内で神事が行われています。

大祭前日は、朝から夕方まで奉納行事として舞踊・歌謡、子ども歌舞伎、向峠神楽、福餅まきが行われました。

大祭当日は、午前中に神事と岩国南条踊の奉納があり、その後、12時半ころから17時ころまで御神幸行列が町内を巡行します。御神幸行列は、神官、雅楽員、巫女のほか、神輿担ぎ、奴道中、小金幣奉持（稚児）、岩国南条踊、太鼓飾り（山車）（以下、「山車」とする）が参加しました。

第11回大祭では、岩国地区の自治会より6台の山車が出されました。

氏子の範囲は、岩国地区、川西地区の全体と、錦見地区の一部（4丁目、7丁目）であり、氏子の範囲にある家々には、大祭の際、御幣や幟が掲げられます。また、氏子は椎尾八幡宮への献灯の寄進も行っています。

稚児行列は、地域の幼稚園、保育園、子供会などへの参加の呼びかけや、自治会の協力を得て直接参加の呼びかけを行います。その結果、第11回大祭では、200人を超える子供たちの参加がありました。衣装などの整理は西岩国婦人会が担っています。



第11回大祭 境内を出発する神輿
（出典『第十一回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』
（平成26年（2014）））



第11回大祭 行列の様子
（出典『第十一回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』
（平成26年（2014）））



第11回大祭 奴道中
（出典『第十一回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』
（平成26年（2014）））



軒下に御幣が掲げられた様子



第11回大祭 自治会から出される山車
（出典『第十一回椎尾八幡宮三十三年式年大祭記録』
（平成26年（2014）））

神輿や山車の御神幸ルートは開催の都度、地域の状況などを踏まえて検討されており、一様ではありませんが、平成25年（2013）の第11回大祭のルートを下図に示します。12時半ころに椎尾八幡宮を出発し、大明小路を旧佐伯家住宅及び門塀の前を錦帯橋に向かって北上します。錦帯橋の手前を左折し岩国地区を巡り、臥龍橋^{さえき}を渡って川西地区を巡ります。再び岩国地区に戻り、岩国小学校近くに設置された休憩所にたどり着くと、山車は終了となります。神輿はその後、岩国小学校の裏手側を回り、途中車上神輿での御神幸を挟んだのち、大明小路を通過して、椎尾八幡宮に戻り終了となります。

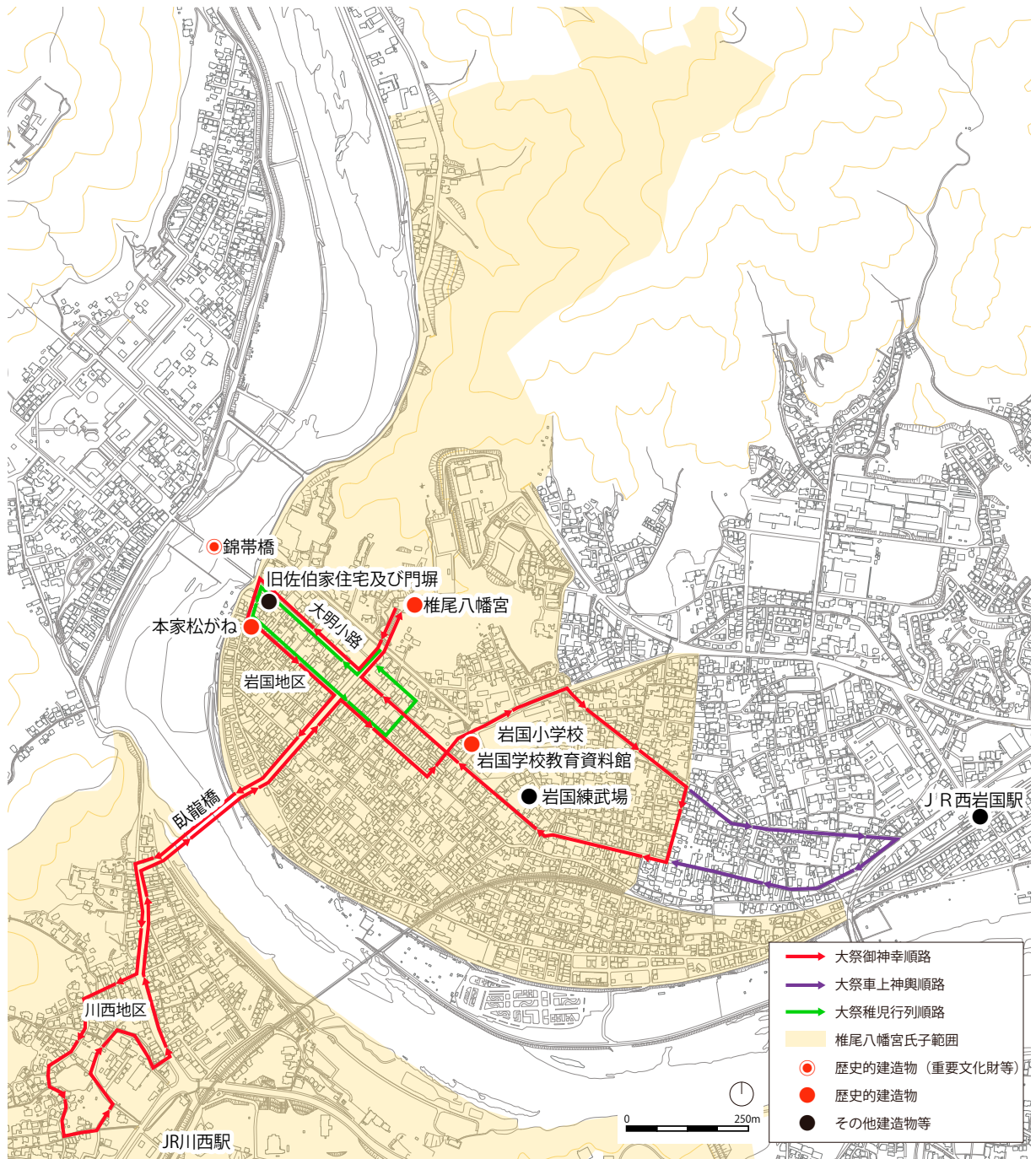


図2-12 第11回大祭の御神幸ルート

3) 観光

きんたいきょう

① 錦帯橋まつり



錦帯橋まつりの様子 (出典：岩国市ホームページ)

錦帯橋まつりは、昭和32年(1957)に第1回岩国祭としてその歴史が始まりました。昭和37年(1962)から昭和44年(1969)の8年間は、岩国城天守閣が再建されたことをきっかけにして岩国城まつりとして岩国城下町地区での祭りが行われましたが、昭和45年(1970)に岩国市内で開催されていた岩国祭、岩国城まつり、農業祭の3つの祭りを統合し、岩国まつりとして昭和56年(1981)までの12年間開催されていました。

また、昭和48年(1973)に錦帯橋創建300年として第1回錦帯橋まつりが開催されたことを機に錦帯橋まつりも継続開催されるようになっていました。そのため、昭和57年(1982)から、岩国祭はJR岩国駅周辺の中心市街地で行われる秋祭りとし、錦帯橋まつりは岩国城下町地区で行われる春祭りとして開催されています。



第1回岩国まつり『岩国市報』(昭和45年(1970))



第6回岩国城まつり『岩国市報』(昭和42年(1967))

67年の歴史を有する岩国城下町地区の春の祭りは、「錦帯橋まつり」と名前を変えて45回の開催を数えています。

その長い歴史の中で、鉄砲隊共演、岩国太鼓といった多くの新しい行事も開催されるようになり、通津奴道中といった古い歴史を持つ民俗芸能が錦帯橋まつりに参加をして、奴道中行列に伝統と花を添えるように常に進化をしています。

その中でも、4月29日（祝日）に岩国南条踊、奴道中、小糠踊りといった伝統な民俗芸能の行列が岩国城下町を行進する姿は変わらず、岩国城下町地区の風物詩として地域の人々のみならず多くの観光客の目を楽しませています。



第45回錦帯橋まつりポスター
(令和5年(2023))



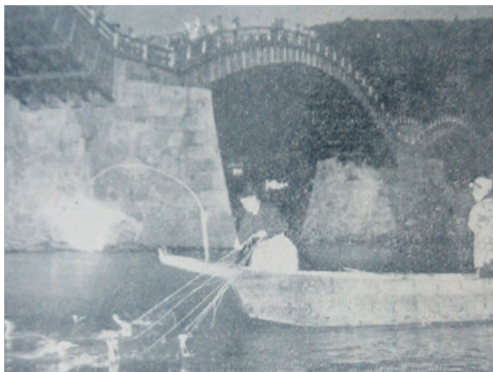
錦帯橋を渡る奴道中と岩国城（出典：岩国市ホームページ）



錦川河川敷での鉄砲隊共演（出典：岩国市ホームページ）

②錦帯橋のう飼

戦後、岩国の観光振興のために鵜飼舟を錦帯橋下に導入することを求める声がおこり、錦帯橋周辺でう飼を毎夜展開することとなりました。う飼の様子については、昭和29年（1954）の岩国市報などの古写真が残っています。こうして錦帯橋の夏の風物詩が始まり、運営方法・経営主体を変えつつ、観光の目玉として今日まで続いています。



う飼の様子（出典：『岩国市報』昭和29年（1954）6月5日）



う飼の様子（出典：岩国市ホームページ）

現在のう飼は、6月1日～9月10日の19時から21時頃に行われます。う飼で用いられる鵜の飼育は吉香公園内の「吉香鵜の里」で行われています。

鵜飼舟と遊覧船が出発する場は「まわし場」と呼ばれ、^{うしやう}鵜匠 1名と漕ぎ手2名が、先端に^{かがり}篝火を灯した鵜飼舟に乗り込み、う飼が開始されます。

鵜匠は左手を巧みに用いて手縄を操作し、右手で鵜をさばきます。鵜が鮎を捕まえると手縄をたぐり鵜を引き揚げ、^{びく}魚籠の中に鮎をはき出させて鵜を川に離してやります。遊覧船から見物客はう飼の様子を眺めますが、錦川兩岸の土手や錦城橋でもう飼を見物する人もみられます。

夏の夜空の下、美しくライトアップされた錦帯橋、間近に迫る鵜舟の篝火に、古式ゆかしい衣装に身をかためた鵜匠が巧みな手縄さばきで鵜をあやつる幻想的で神秘的な光景が楽しめます。

う飼が終わりまわし場に鵜飼舟が戻ると、鵜を鵜飼舟に引き上げ、篝火の残り火の下で鵜を休ませてから鵜籠に入れる「^{うしま}鵜仕舞い」が行われます。鵜仕舞いでは、多くの人がまわし場に集まり、船辺に並んで立ち休憩する鵜を至近距離で眺めます。



吉香鵜の里



鵜飼舟と遊覧船（出典：岩国市ホームページ）



う飼の様子（出典：岩国市ホームページ）

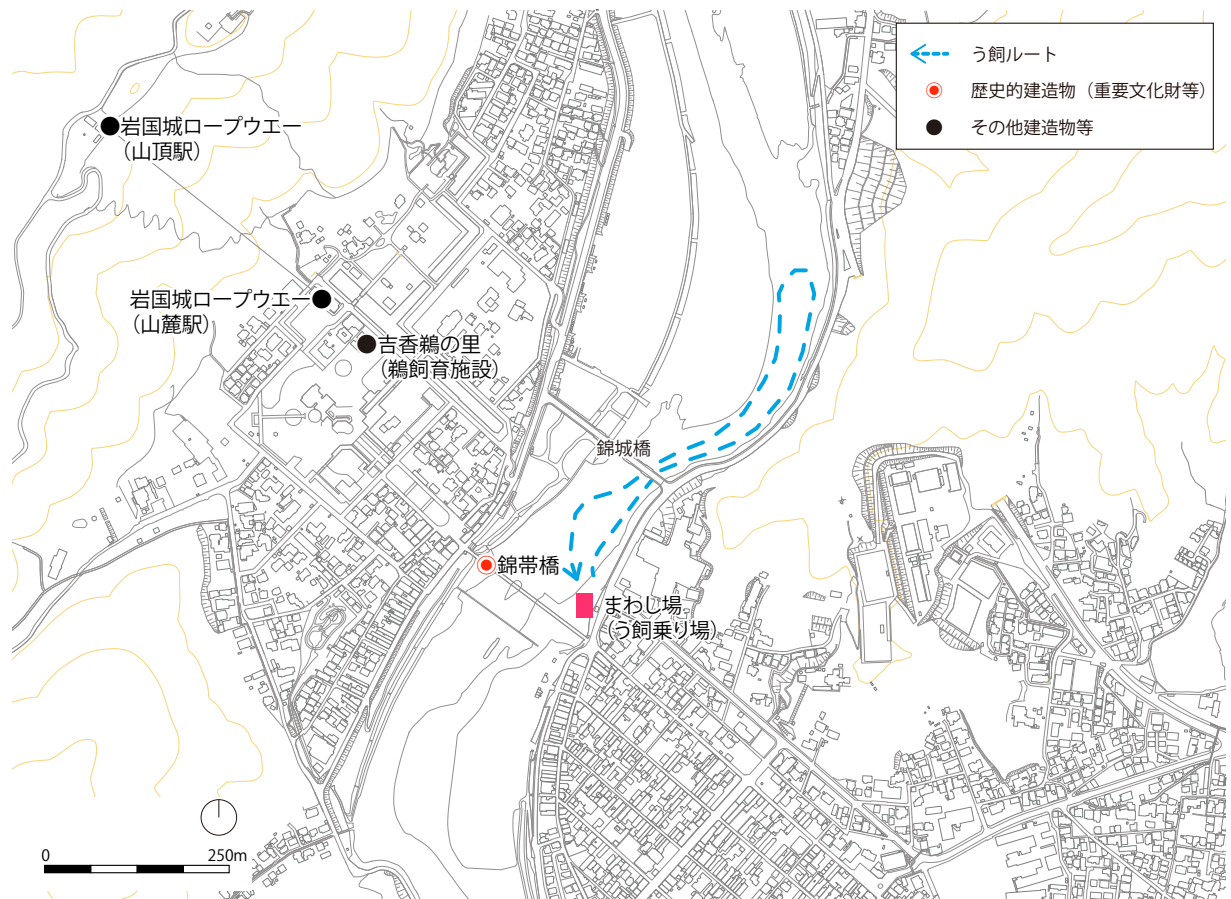


図2-13 錦帯橋のう飼の範囲

③花見

近世の岩国においても吉川家居館などに桜はあったようで、家臣より桜が献上されたという記録があります。

近代になると、大規模な桜の植樹が進みます。吉川家元執事長である^{ふじた しげる}藤田 葆の日記には、明治19年(1886)には旧領主である吉川家から贈られた約200本のソメイヨシノが吉香神社などに植えられたと記されています。明治37年(1904)の吉香神社や厩門と桜が写された絵葉書が残されています。

以降も土手・河原などでの桜の植樹は進み、錦川右岸の河原や土手、吉川家居館跡周辺などは山口県内でも有数の桜の名所となりました。大正時代や昭和初期の花見で賑わう様子を写した古写真が残されています。

戦後においても桜の名所としての賑わいは続いており、昭和29年(1954)4月の岩国市報では、花見シーズンに交通規制を実施する案内がなされています。

平成2年(1990)には、日本さくら名所100選に「吉香公園・錦帯橋」として選定されており、近代以降における人々の往来を作り出す要素となっています。



吉香神社と桜の絵葉書
(明治37年(1904)、岩国徴古館蔵)



厩門と桜の絵葉書
(明治37年(1904)、岩国徴古館蔵)



吉香公園の花見(大正時代、岩国徴古館蔵)

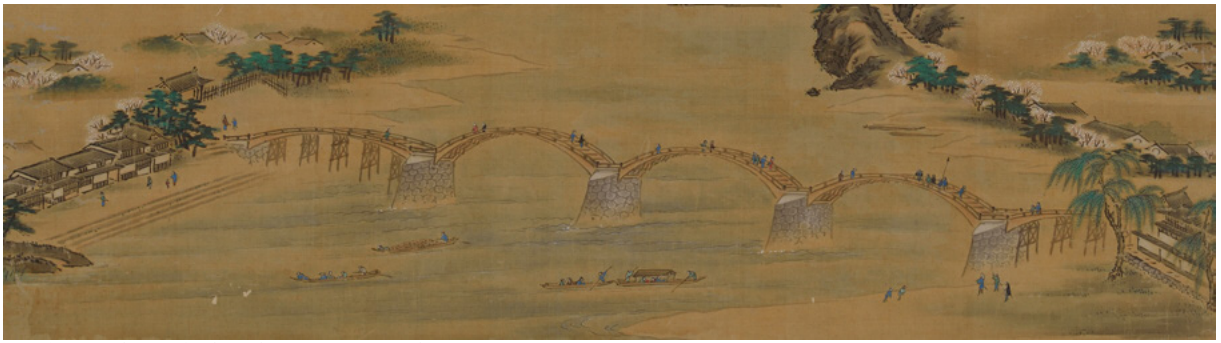


花見の季節の横山(昭和初期、岩国徴古館蔵)



吉川史料館前の桜(昭和初期、岩国徴古館蔵)

『錦帯橋絵図』(文化5年(1808))^{ぶんか}では渡し舟の様子が描かれており、昭和初期の写真にも見られるように、錦帯橋周辺では遊覧船から錦帯橋やその周辺を観る文化が早くから根付いていました。



錦帯橋絵図（文化5年（1808）・岩国徴古館蔵）

現在は、その遊覧船の文化を受け継いで、花見の季節となる3月中旬～5月の週末と祝日には春の遊覧船「さくら舟」が運航されています。



昭和初期の錦帯橋と遊覧船（岩国徴古館蔵）



錦帯橋とさくら舟（出典：岩国市ホームページ）

錦帯橋周辺には、約1,500本の桜が植えられており、3月下旬から4月上旬にかけて見頃を迎えます。満開の桜が並ぶ土手と錦帯橋の対比は絶景です。

花見のエリアは大きく錦川右岸の土手・河原と吉香公園、吉香神社周辺に分けられます。花見シーズンには桜並木に沿って提灯が下げられ、訪れた人々は土手の遊歩道を歩く、河原にシートを広げ憩うなど、思い思いの過ごし方をしています。

吉香公園においても、錦帯橋を渡った先から公園中央部までの通りに桜が並び、噴水の周りや岩国城ロープウエー前の駐車場周辺、吉香神社を取り囲む吉川家居館跡周辺などに桜が植えられ、岩国城下町における観光動線を彩り、訪れる人々が歴史的建造物や見どころを散策しています。

また、岩国城ロープウエーに乗り山頂に登ると、そこにも桜が植えられており岩国城と桜を楽しめるほか、岩国城下を見下ろすと錦川沿いや吉香公園、吉香神社において広範囲に咲き誇る桜を一望することができます。



お堀・桜（出典：岩国市ホームページ）



夜の錦帯橋と桜（出典：岩国市ホームページ）



錦帯橋と花見の絵葉書 (昭和10年代、岩国徴古館蔵)



錦帯橋と桜 (出典：岩国市ホームページ)

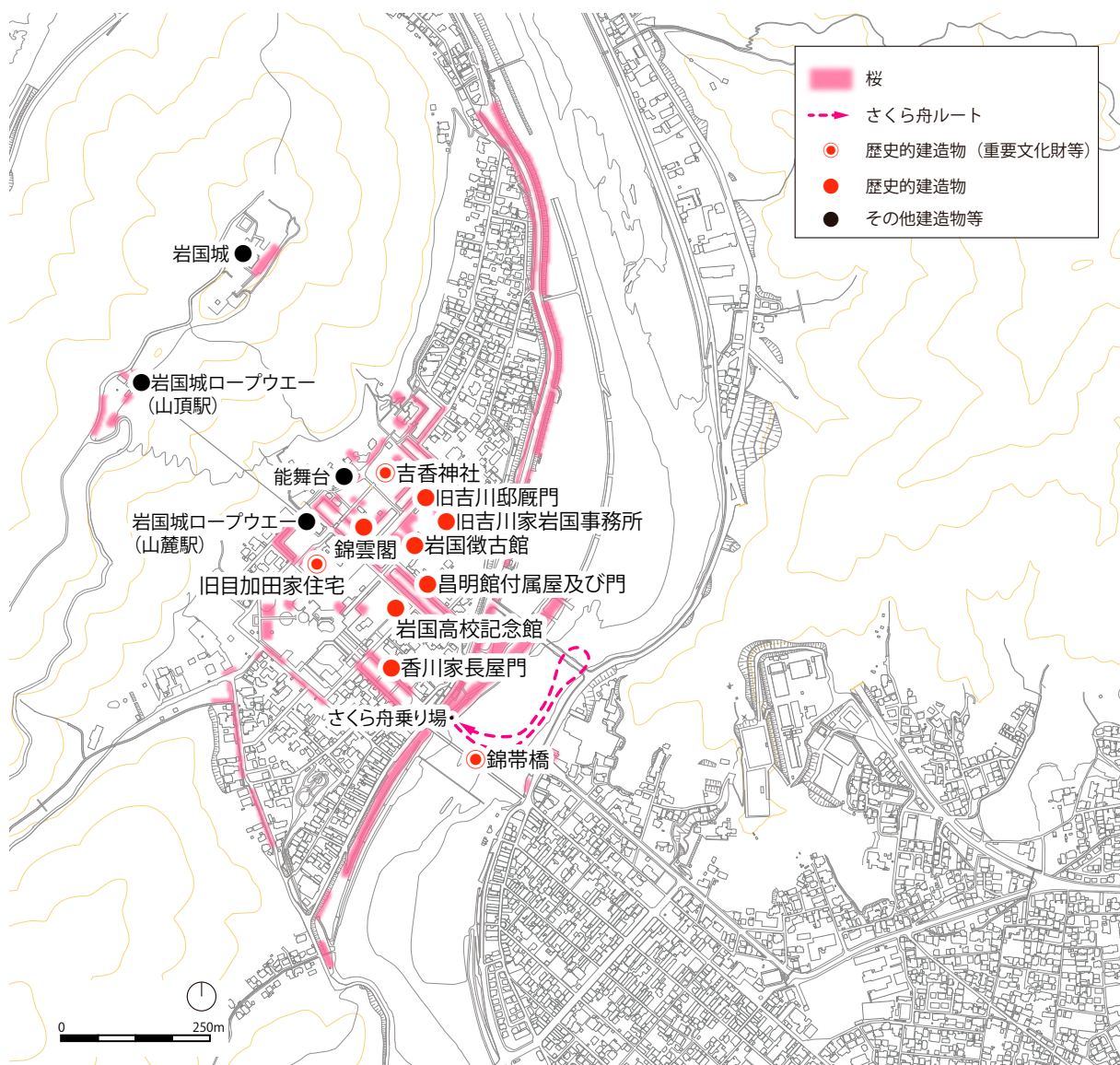


図2-14 花見の範囲

(4) おわりに

岩国城下町は、錦帯橋によって錦川兩岸が結ばれた近世の地割をよく継承しているとともに、武家屋敷、町家、寺社が一体となって、かつての面影を色濃く伝えています。人々は、このような歴史的なまちなみや建造物を舞台に、歴史ある祭礼や行事といった営みを受け継いできました。

吉香神社例大祭などで行われる岩国南条踊において、紋付き袴姿の踊り子が輪になり、唄や笛、太鼓などの音に合わせて踊る様子は、勇壮さを感じさせます。一方、岩国地区の寺や町家を背景に練り歩く小糠踊りは、浴衣姿の人々が三味線や笛に合わせて手踊りする風情ある踊りです。

岩国城下町に伝わる民俗芸能が一堂に会するのが錦帯橋まつりです。岩国地区から錦帯橋を渡り、横山地区へと進んでいく行列には、奴道中（錦見イキリ子）、岩国南条踊や小糠踊りなども加わり、大きな盛り上がりを見せています。

岩国地区で行われる33年期に一度の椎尾八幡宮大祭では、通りに面して御幣が飾られ、神輿や山車とともに煌びやかな衣装の人々が御旗^{みはた}などを携えて練り歩きます。その様子は、地域の人々が一体となって受け継いできた風景です。

さらに、錦帯橋は江戸時代より広く知られることにより観光が花開き、現在まで多くの観光客を惹きつけています。

春、錦川沿いに桜が満開になるころには、錦帯橋や錦川の河原、吉香公園や岩国城周辺で桜を眺める多くの人々の姿が見られます。夏の夜には、錦川での錦帯橋のう飼を楽しむ人々の姿が見られ、錦帯橋を背景に篝火の灯りや鵜の鳴き声が広がり、涼を感じさせる風物詩となっています。

明治以降、横山地区への教育施設の立地、戦後の岩国城再建、岩国城ロープウエーや吉香公園の整備などにより、錦帯橋を中心とした観光が発展しながら今に受け継がれてきました。

このように、岩国城下町では、錦帯橋を中心に歴史的なまち割や建造物からなるまちなみと、そこでの多彩な営みが一体となって受け継がれており、将来にわたって守り伝えるべき歴史的風致を形成しています。

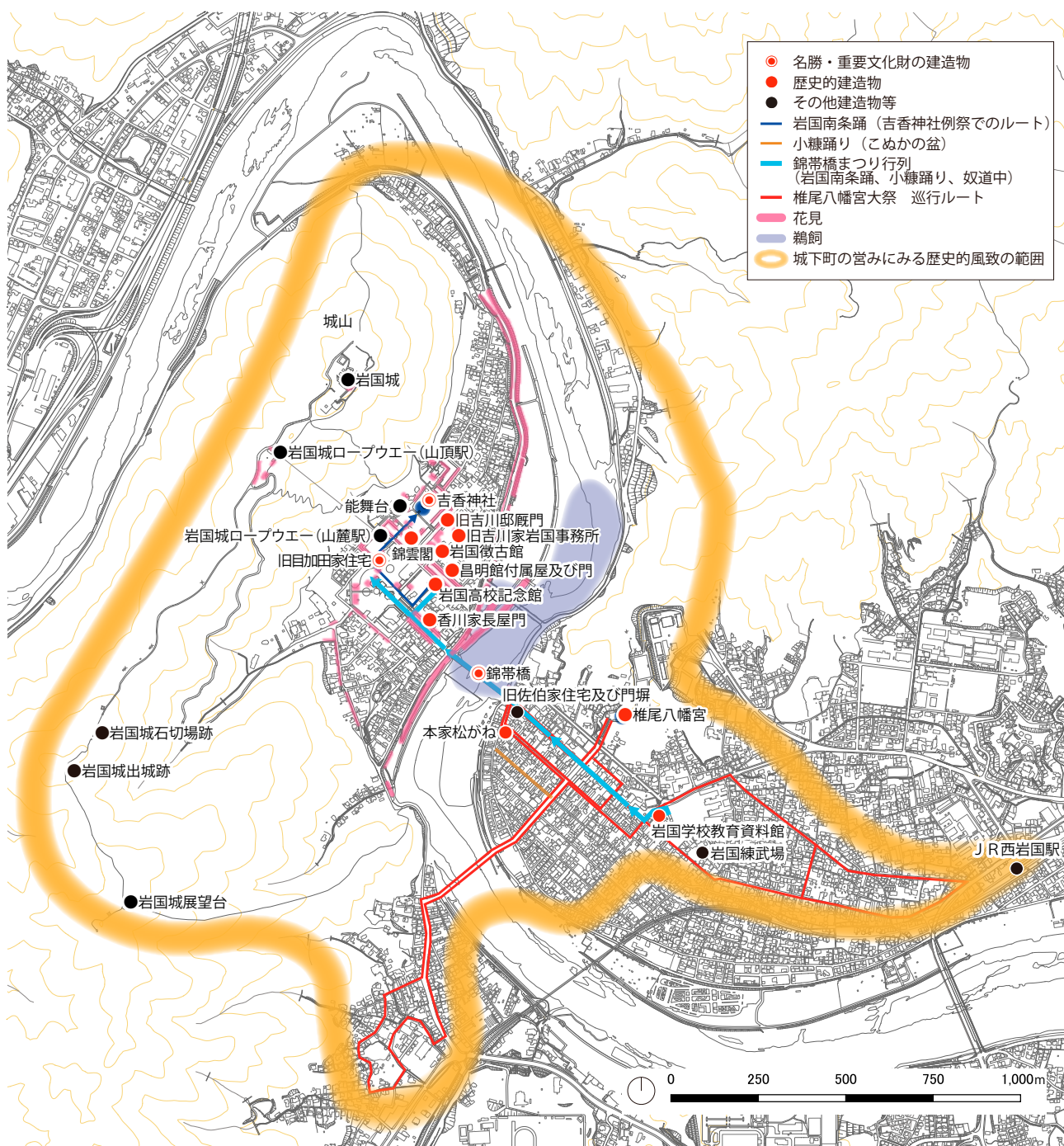


図2-15 岩国城下町の営みにみる歴史的風致の範囲

つづやっこどうちゅう
【コラム】 通津 奴 道 中

岩国領の初代領主である吉川広家が隠居した折に、隠居先の通津の人々に奴道中を伝えたものが現在の通津奴道中の礎になったといわれており、大人数の奴が先頭から後ろまで一糸乱れぬ動きを行い、三間槍^{さんげんやり}を豪快に振り回す姿がその特徴です。

平成10年(1998)の第21回錦帯橋まつりから本格的に参加していますが、古くから通津^{ほこ}の鉾八幡宮の秋祭りにおいて通津の町中を行進し、近年は通津中学校での民俗芸能の伝承と普及活動にも力を入れています。



通津奴道中・鉾八幡宮下(昭和初期)
(通津奴道中保存会提供)



通津奴道中の練習風景・通津小学校(昭和48年(1973))
(通津奴道中保存会提供)

